

映画「散り椿」

S26年 経済 久津正行

大変、評判になった作品である。美しい時代劇である。

黒澤明監督の数々の名作のカメラマンとして、名声を博した木村大作監督の監督兼撮影した初めての時代劇でもある。作品は恩師黒澤監督へのオマージュになっている。

この美しい時代劇をかくもうまく構成できたものは何か、という事になるが、葉室麟の原作「散り椿」の日本美を謳い挙げた名文をあげないわけにはいかない。日本の武士の中に熟成された“儒教精神”を徹底している言動が、今日、忘れられている、五常（仁、義、礼、智、信）を弁えた武士たちによって見事なまでに描かれている。

映画「散り椿」はその心を巧みに映像化したものである。



黒澤明監督は本物同様なセットを作って、ストーリーを展開させ、納得できる芸術映画を描きあげてきたが、それに鍛え込まれた木村監督は、今回は実際の現場の、立山、富山地方の荘厳な自然の中で、その精神性を高揚させ、オールロケーションで、静謐ながら迫力ある映像を創りあげる事に成功した。

物語は、享保15年、扇野藩藩士、瓜生新兵衛（岡田准一）は8年前藩内の不正を訴え出たが聞き入れられず、藩を離れ、妻、篠（麻生久美子）をともなって京都で暮らしている。

その後、疑い晴れて藩へ舞い戻り、亡き妻の愛した「散り椿」にまつわる想いを果すことを約束した新兵衛はかつての親友との絆と共に、「散り椿」の散る中で藩の悪徳家老、石田玄藩（奥田瑛二）葬りさる話しである。



木村監督は「散り椿」の原作に書かれた「大切に思えるものに出会えば、それだけで幸せだと思っております」という言葉に、自分のに出会ってきた人生と重なるものを感じたという。今年で映画人生60年を迎えた監督が、その時どきで

出会ってきた大切な映画人との映画創りの体験を基軸に、多重式カメラの使い方を駆使して、クローズアップを多用して、江戸時代から明治に亘る武士たちの気概を、繊細さと大胆さ、美しさと強靭さを巧く重ね合わせている。

加えて、木村監督は、嘗て、「用心棒」「椿三十郎」「隠し砦の三悪人」などで見せた際立ったアイデアを、本作品にも地味ながら隠し味に使っている。新兵衛の妻、篠が心に描いた「散る椿は残る椿があると思えばこそ見事に散っていけるのだ」と示される登場人物の運命にも重ね合わせている。映画は監督の美意識を覗かせている。